

米国人教師W.L.シュワルツの残した薩摩焼の記録

山下 廣 幸

Records of Satsuma Pottery in early 1910's that was left by W.L.Schwartz

Hiroyuki Yamashita; Kagoshima Prefectural Museum of culture-REIMEIKAN

ABSTRACT

William Leonard Schwartz had lived in Kagoshima during 1902-1905 in his childhood with his family and again during 1910-1914 as a young professor at Daishichi Koto Gakko Zoshikan (The 7th High School). He taught English composition and conversation at the Zoshikan, and also introduced various events of those days Kagoshima to the world. For example, he happened to witness the violent eruption of Mt.Sakurajima, on January 12, 1914. At that time he made many glass-slides using the photographs of the event which he took. In the early 1920's after he went back home from Kagoshima, he made presentations about that eruption showing those glass-slides in various cities of Britain and U.S.A.

The Satsuma Pottery (Satsuma-yaki) was also his interested subject. He took many photos of potters and pottery of Satsuma and made glass-slides during his stay in Kagoshima. Later on December 9, 1921, he published an article on this subject and presented it at the meeting of Japan Society of London using his glass-slides and illustration. This monograph titled "The Potters and Pottery of Satsuma" was published in Vol. 19 of the "Transaction of the Japan Society of London".

In this article, the auther wants to introduce W.L.Schwartz's glass-slides and article about Satsuma-yaki.

This article was prepared based on the data and information presented by Mrs. Virginia S. Mueller, W.L.Schwartz's daughter, who now lives in California, U.S.A. The auther would like to express deep profound gratitude to Mrs. V.S. Mueller.

1 はじめに

ウィルリアム・レオナード・シュワルツ (WILLIAM LEONARD SCHWARTZ) は、明治 43 (1910) 年から大正 3 (1914) 年まで、第七高等学校造士館の英語教師として鹿児島に居住し、鹿児島を世界に発信した人である。大正 3 年 1 月には、桜島の大爆発に遭遇しており、その様子を写真撮影してガラススライドに作り、アメリカに帰国後各地でスライドの上映を行っている。

また、彼は桜島大爆発がおこる以前は薩摩焼に興味を持ち、彼自身も窯元に行って焼物を学び、作品や陶工などを写真撮影して記録に残し、いくつかの作品を収集している。

さらに、論文『薩摩の陶工と陶器』(THE POTTERS AND POTTERY OF SATSUMA) を発表しており、薩摩焼の歴史や W.L. シュワルツが鹿児島にいた当時の薩摩焼に関するいろいろな様子を知ることができる。

ここでは、W.L. シュワルツが残した薩摩焼に関するガラススライドと論文を紹介することにするが、これらのガラススライドや論文は、W.L. シュワルツの娘にあたるバージニア・S・ミューラー夫人から黎明館に寄贈されたり、あるいは情報を得たものである。

2 W.L.シュワルツについて

W.L. シュワルツの略歴については、ミューラー夫人の夫ポール氏がまとめたもの(『A Short History of

the Life of WILLIAM LEONARD SCHWARTZ. From 1888 to the early 1920's』) を参考に、1880 年から 1920 年代はじめにかけての略歴を紹介する。

年 月 日	W. L. シュワ ル ツ の 動 き
1888 年 11 月 4 日	マサチューセッツ州クインシィに生まれる。父ヘンリィ・バトラー・シュワルツ (Henry Butler Schwartz) は、当時、ウォールストンのメゾジスト教監督派教会の牧師であった。母はメリー・エブリン・フレイジア。
1890 年 12 月 27 日	妹アンナ・デール・シュワルツが、マサチューセッツ州ニューバリュポートで生まれる。
1893 年	父が宣教師として、家族とともに日本に渡り、1897 年までに、横浜、築地、弘前、青山に住む。
1897 年	弟ジョン・シュワルツが生まれるが、すぐに亡くなる。
1899 年 10 月 16 日	2 年間のアメリカ帰国中、妹のローラ・バージニア・シュワルツが、マサチューセッツ州ボストンで生まれる。
1900 年～1902 年	長崎ですごす。父が、アメリカ領事館の裏にあったメゾジスト鎮西セミナリオの校長となる。この間、W. L. シュワルツは、キリスト教徒のフランス人同志が指導するエコール・ド・エトアール・デ・ラ・メールでフランス語を学びはじめる。ここで 4 学期を過ごした後、妹のアンナと共に中国のチーフー（芝罘）にある英国系の中国国内ミッション少年少女学校に移る。
1902 年 8 月	家族は鹿児島に移り、春日町 61 番地に住む。父はメゾジスト鹿児島地区の責任者となる。
1904 年	チーフーの学校を終了し、鹿児島に帰る。
1905 年	日露戦争が勃発。日本軍が遼東の戦いで勝利したとき、鹿児島での戦勝行列に、飾り立てた自転車で参加する。その後、家族はアメリカに帰り、カリフォルニア州のロサンゼルスで生活する。W. L. シュワルツは、南カリフォルニア大学付属高校で学び、その後 2 年間大学で勉強する。そして、1910 年までにオハイオ州のデラウェアにあるウエスレアン大学で文学士となる。(彼の両親もこの大学で学位を受けている)
1907 年	W. L. シュワルツを除いて、家族は鹿児島の春日町 61 番地に帰る。沖縄の那覇に移住し、1915 年まで滞在。
1908 年	短期間であったが鹿児島を訪問する。父 H. B. シュワルツの著書『東郷の国で』が出版される。
1910 年～1914 年	第七高等学校造士館で英語の作文と会話を教える教師となる。学校は、月曜日から金曜日は午前 8 時から午後 3 時まで、土曜日は午前中であった。多くの生徒は、

	<p>1週間に9時間の英語の授業を受けた。7学級あり、各学級およそ36人の生徒がいた。生徒達は、1学期に3本の長い作文を書き、そこからW.L.シュワルツは、『うなる人と珍奇なもの』を編集した。</p> <p>下竜尾町76番地に住み、彼の妹ローラの乳母であった年老いた田中ハルが、独身であった彼の面倒をみた。趣味として、日本語の勉強、日本に関する書籍の収集、バイオリンの演奏、自転車、水泳、テニス、作陶、日本中の旅行をする。</p> <p>松江の出雲大社に関する論文（1913年10月発行）と薩摩方言の研究（1915年10月発行）の論文を執筆し、日本アジア協会から出版される。</p>
1914年1月12日	桜島大爆発に遭遇し、この出来事をガラススライドに作り、1920年代のはじめイギリスとアメリカで講演する。
1914年4月	長崎高等商業学校の英語教師となり、長崎の東山手12Dに住む。長崎滞在中の趣味は、タイガーと名付けた20フィートのモーターボートでの航海。
1919年	1893年に来日してから25年後、30歳で日本を去る。日本を去る前、薩摩焼と陶工に関するガラススライドを作成し、論文を書く。
1921年10月9日	ロンドンの日本協会で論文を発表し、スライドを映写する。写真入り論文『薩摩の陶工と陶器』が、ロンドンの日本協会の紀要第19巻に掲載される。

以上の略歴は、主にW.L.シュワルツの妻となるアンステイス・チャーチル・ブライアントへの、1920年代のはじめの長い手紙に書かれていることをまとめたものである。この手紙の中でW.L.シュワルツは、鹿児島は日本の他のどの場所よりも良く知っている町であると書いている。W.L.シュワルツは、ここで1902年から1905年は家族とともに少年時代を過ごし、1910年から1914年は第七高等学校の若き独身の教授として過ごしたのである。



W.L.シュワルツ, 1914年頃



W.L.シュワルツ父子, 1908年頃

残念ながら、日本を去ってからのW.L.シュワルツの経歴については資料を入手していないので不明であるが、今後このところを紹介する機会があればと思う。

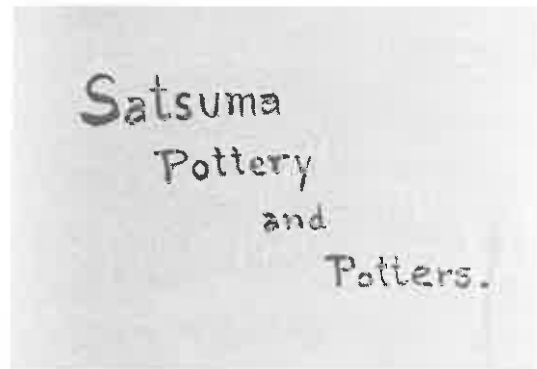
3 ガラススライド

このガラススライドは、大きさ縦8.2cm、横10.7cm（写真が横位置の場合の大きさであり、縦位置の場合には逆になる）あり、全部で81枚残っている。スライドの順序は、どのようになっていたか不明であるが、モノクロポジ54枚、カラーポジ11枚、モノクロネガ16枚である。

これらのスライドには、作品の名称、人物の名前、撮影の場所・日時などの記録は何もなく、これだけでは少ない情報しか得られない。幸いなことに、W.L. シュワルツの娘に当たるミューラー夫人が、W.L. シュワルツが作成した小型のアルバムを所有しておられ、これと比較することによって、写真の内容を大部分決定することができた。



アルバム(表紙)



アルバム(タイトル)



アルバム内容(薩摩焼)



アルバム内容(陶工)

W.L. シュワルツのアルバム

スライドの内容は、モノクロポジ（薩摩焼作品・絵付下絵・人形・人物）、カラーポジ（薩摩焼作品、絵付下絵）、モノクロネガ（薩摩焼作品・絵付下絵・人物）に分類される。（一覧表参照）

次にスライドを紹介するが、名称については筆者が命名したものであり、内容については、前述したアルバムを参考にした。

ガラススライド一覧表

モノクロポジ (薩摩焼作品)		41	牡丹文茶碗下絵
1	白薩摩飛鶴文花瓶	42	菊花文六香炉下絵
2	白薩摩仙人図花瓶・白薩摩花卉図花瓶	43	下絵集 (寿老人・雀・金魚等)
3	白薩摩浮彫香炉・花瓶	44	丁字風炉絵付デザイン
4	白薩摩透彫宝袋形香炉・白薩摩浮彫香炉	45	燈台絵付デザイン
5	白薩摩菊唐草文把手付皿・白薩摩菊散し瓢形花瓶	46	花瓶・割文デザイン
6	白薩摩茶碗 (全体と高台)	47	絵付下絵
7	白薩摩雲珊瑚文茶碗	48	絵付下絵
8	白薩摩菊桐文香炉	49	絵付下絵 (山水図)
9	古帖佐火計り茶碗	モノクロポジ (人物)	
10	興業館蔵の薩摩焼	50	窯場における W.L. シュワルツ
11	白薩摩牡丹文花瓶	51	川原源助・市来栄吉
12	白薩摩耳付花瓶	52	山下雪山・森山賢二 (探賢)
13	白薩摩秋草文耳付花瓶	53	林平兵衛の茶室
14	白薩摩茶碗	54	龍門司風景 (1913 年)
15	白薩摩寿老人像・香炉	カラーポジ (作品)	
16	白薩摩丁字風炉	55	飾り棚の薩摩焼
17	白薩摩菊・藤文茶碗	56	飾り棚の薩摩焼
18	芳工作花瓶・交河土銘茶碗等	57	薩摩焼の茶碗・観音像
19	蛇蝎釉茶碗・黒釉竹節花瓶	58	白薩摩花鳥文花瓶
20	蛇蝎釉耳付花瓶・蛇蝎釉花瓶	59	白薩摩浮彫香炉と透彫蓋物
21	薩摩焼人物・象図硯屏	60	白薩摩窓絵花瓶・葡萄文花瓶
22	蛇蝎釉茶碗	61	白薩摩獅子乗香炉・鼓形花瓶
23	鯨肌釉茶碗・蛇蝎釉花瓶	62	白薩摩茶碗・獅子乗香炉
24	白薩摩梅文香炉・蛇蝎釉茶碗	63	薩摩焼雲文茶碗・硯屏
25	薩摩焼宋胡録写し丁字風炉	64	龍門司焼 4 点
26	蛇蝎釉兜香炉・白薩摩香炉 (線香立)	65	べっ甲釉香炉
27	土瓶・花瓶・香炉・陶製刀	モノクロネガ (作品・下絵・人物)	
28	寛文三年銘飴釉仏花器	66	ネガ 白薩摩飛鶴文花瓶
29	元禄十四年銘白薩摩花瓶・黒薩摩壺	67	ネガ 白薩摩仙人図花瓶・白薩摩花卉図花瓶
30	三島手茶壺他 6 点	68	ネガ 白薩摩茶壺形飾茶壺
モノクロポジ (人形)		69	ネガ 白薩摩浮彫香炉・花瓶
31	白薩摩福祿寿像	70	ネガ 白薩摩透彫宝袋形香炉・白薩摩浮彫香炉
32	白薩摩七福神像	71	ネガ 白薩摩菊桐文香炉
33	白薩摩大黒像他	72	ネガ 白薩摩菊唐草文把手付皿・菊散し瓢形花瓶
モノクロポジ (下絵)		73	ネガ 白薩摩茶碗
34	硯屏下絵	74	ネガ 白薩摩雲珊瑚文茶碗
35	香炉下絵	75	ネガ 寛文三年銘飴釉仏花器
36	三国名勝図会 (1) 苗代川焼の絵	76	ネガ 薩摩焼花瓶・茶碗等
37	三国名勝図会 (2)	77	ネガ 薩摩焼花瓶・茶碗
38	城下町屏風	78	ネガ 白薩摩大黒像他
39	漢詩	79	ネガ 白薩摩七福神像
カラーポジ (下絵)		80	ネガ 硯屏下絵
40	菊花文茶碗下絵	81	ネガ 市来栄吉



(1)白薩摩飛鶴文花瓶
黒松清兵衛蔵。肥後如雪絵付。1890年頃



(2)白薩摩仙人図花瓶・白薩摩花卉図花瓶
船崎吉次郎作，本田松雪絵付



(3)白薩摩浮彫香炉・花瓶
花瓶：上原熊二作，香炉：森田七之助作



(4)白薩摩透彫宝袋形香炉・白薩摩浮彫香炉
隈元金六作



(5)白薩摩菊唐草文把手付皿・白薩摩菊散し瓢形花瓶
黒松清兵衛蔵，1873年頃の皿，磁器の壺 1840年（苗の印）



(6)白薩摩茶碗（全体と高台）
左近充博士蔵，星山印



(7) 白薩摩雲珊瑚文茶碗
山野田一清蔵，およそ 100 年前のもの



(8) 白薩摩菊桐文香炉
1890 年頃



(9) 古帖佐火計り茶碗
加治木曾木貞二蔵，交河土の印，製作者は芳仲，緑褐色，赤色粘土，箱書きに「島津久季御歌 えにしあれは手に取て見る唐土の名に黄河のみな底の土」
【現在 個人蔵(黎明館保管)】



(10) 興業館蔵の薩摩焼 (注 1)



(11) 白薩摩牡丹文花瓶
興業館蔵，柿本製，田之浦 1883 年



(12) 白薩摩耳付花瓶
興業館蔵，沈寿官製 1890 年頃



(13)白薩摩秋草文耳付花瓶
藤田武八郎蔵、昔藩主一族であった大里家に所蔵されたもの



(14)白薩摩茶碗
苗代川 沈正彦蔵、
(左)この地で最初に作られたものの一つと信じている
(右) 領主義久のものと伝えられる



(15)白薩摩寿老人像・香炉
苗代川において



(16)白薩摩丁字風炉
(記録なし)



(17)白薩摩菊・藤文茶碗
(記録なし)

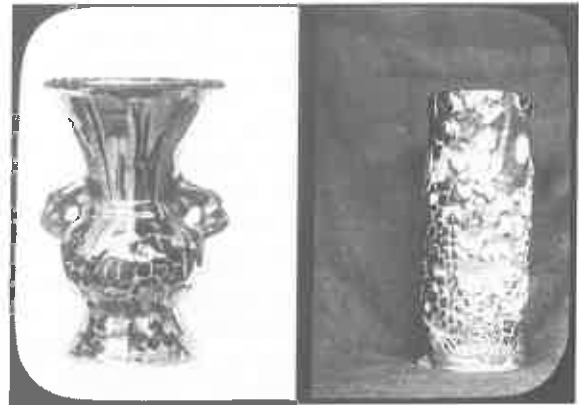


(18)芳工作花瓶・交河土銘茶碗等
加治木 曾木貞二・新納時亮蔵、茶碗：星山金和(1601~1683)と記される、新納家、交河茶碗の底花瓶：川原十左衛門作、1781年 毒消し茶壺
【中央2点は現在、個人蔵(黎明館保管)】



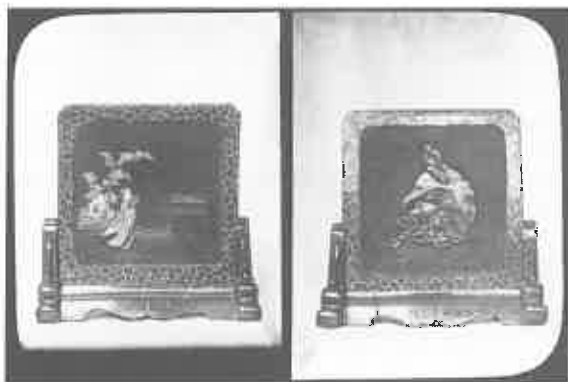
(19) 蛇蝎釉茶碗・黒釉竹節花瓶

慶田政太郎蔵、(左) 観音焼 (右) 古帖佐焼、緑褐色釉



(20) 蛇蝎釉耳付花瓶・蛇蝎釉花瓶

(左) 加治木 曾木貞二蔵、観音焼、Hoshunotama、糸切り
(右) 帖佐 蓑毛三造蔵、赤色粘土、淡緑色素地、褐色や緑色の斑点が緑色上の白色に見られる



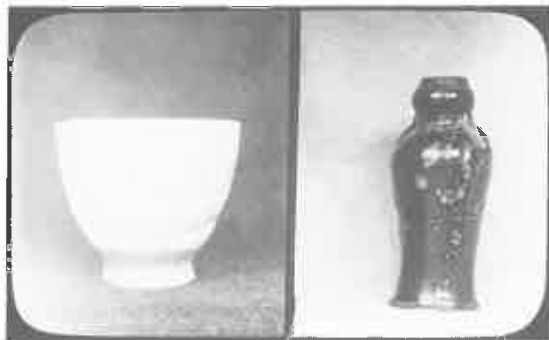
(21) 薩摩焼人物・象図硯屏

豎野で作られた硯屏の両面 加治木 曾木貞二蔵
(左) 人物像：星山嘉入の時代 (1721 年没)、田原宗助作、白い亀裂の装飾、狩野探元のデザイン、緑灰色
(右) 象図：無釉の地に象の造形、元春によるデザイン



(22) 蛇蝎釉茶碗

帖佐 蓑毛三造蔵。淡オリーブ色。暗緑色にくぼみが見られる



(23) 鮫肌釉茶碗・蛇蝎釉花瓶

(左) 帖佐 蓑毛三造蔵、(右) 帖佐 米良栄之助博士蔵



(24) 白薩摩梅文香炉・蛇蝎釉茶碗

(左) まちがいなく二重掛けであり、クリーム色
(右) 帖佐 蓑毛三造蔵、赤色粘土、内側は黒色粘土で厚い



(25) 薩摩焼宋胡録写し丁字風炉



(26) 蛇蝎釉兜香炉・白薩摩香炉（線香立）
黒松清兵衛蔵，香炉は18世紀，線香立は18世紀で、
赤色は釉上，青色は釉下



(27) 土瓶・花瓶・香炉・陶製刀
大館春国蔵，藩主忠義のための黒薩摩，1890年頃。
ガラス質のティーポットと陶器製の付属品の付いた刀



(28) 寛文三年銘飴釉仏花器
（記録なし）
【現在，黎明館蔵 この作品はミューラー夫人から
黎明館に寄贈】（注2）



(29) 元禄十四年銘白薩摩花瓶・黒薩摩壺
（記録なし）【左は，現在（財）日本民藝館蔵】



(30) 三島手茶壺他6点
（記録なし）



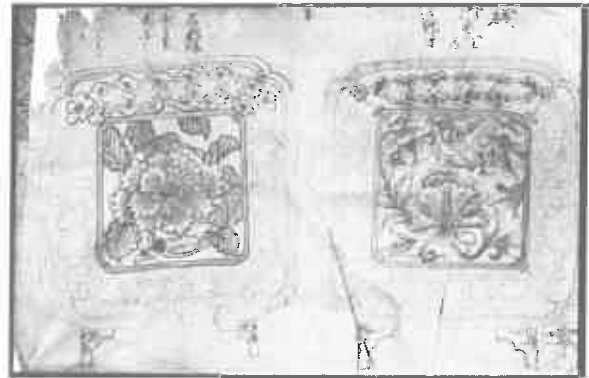
(31) 白薩摩福祿寿像
本人蔵、遠矢金次郎旧蔵品



(32) 白薩摩七福神像
苗代川 東郷寿勝製。1899年



(33) 白薩摩大黒像他
沈寿官製



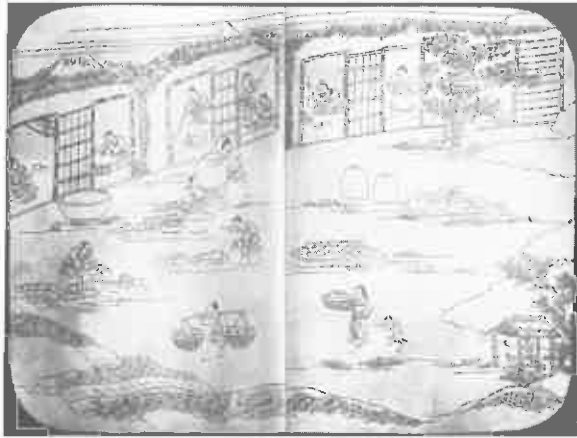
(34) 硯屏下絵
藩主斉彬のデザイン写、図中に「若殿様御自筆図写、弘化三年十月廿三日、硯御茶屋二而被仰付」とある



(35) 香炉下絵
大館春国蔵。1845年デザイン。篤姫の注文品。図中に「篤姫様御用。辰九月廿九日納メ、ズニツ外ニ者ツ」とある



(36) 三国名勝図会(1)
苗代川焼の絵(三国名勝図会から)、1839年頃

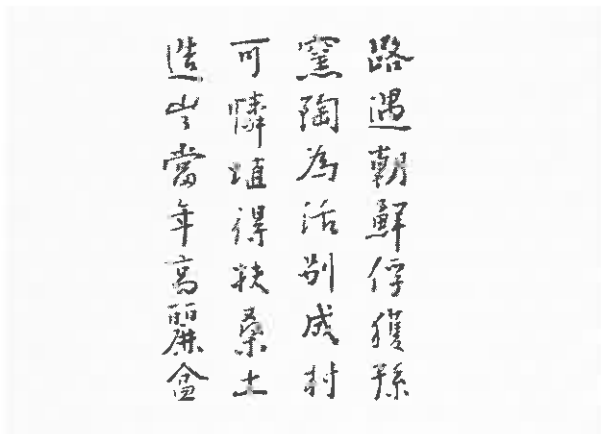


(37) 三国名勝図会(2)

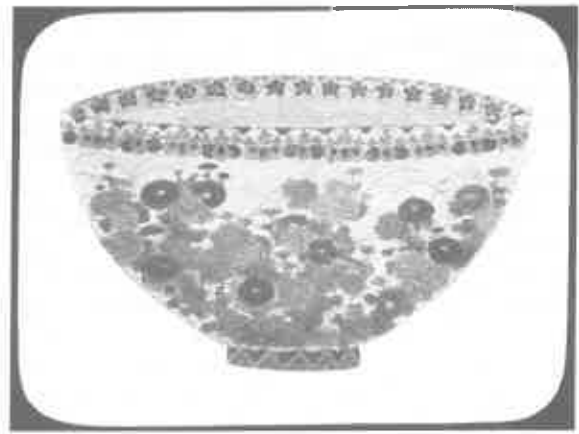


(38) 城下町屏風

1839年の鹿児島島の地図，県立図書館彩色複製品から

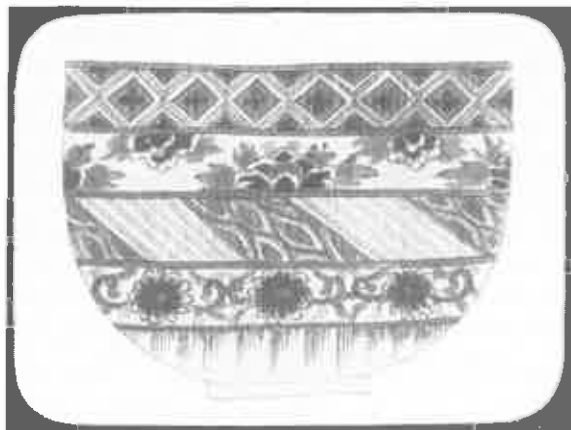


(39) 漢詩



(40) 菊花文茶碗下絵

沈寿官デザイン，1890年頃



(41) 牡丹文茶碗下絵

(記録なし)



(42) 菊花文六香炉下絵

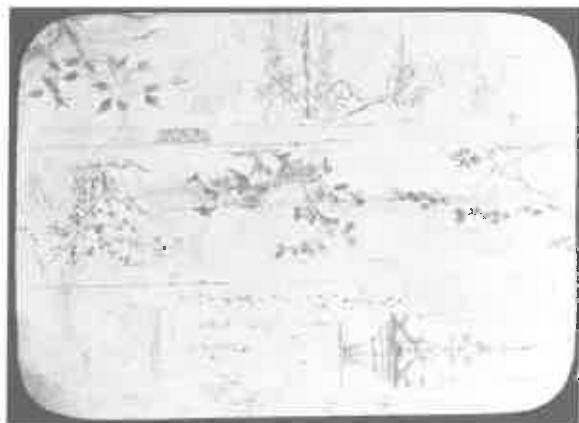
(記録なし)



(43)下絵集(寿老人・雀・金魚等)
(記録なし)



(44)丁字風炉絵付デザイン
図中に「弘化二年巳九月六日、島津豊後殿頼二而焼之、大小忒口内」とある



(45)燈台絵付デザイン
図中に「天保十五年辰六月廿八日上納、少将様へ長州へ被下御用、御燈台六ツ」「御茶碗十コ」とある



(46)花瓶・割文デザイン
豎野, 1845年



(47)絵付下絵
図中に「…伊勢家所持之由…、時天保十四年卯三月十五日写、四尺さし渡シ五寸」「差渡シ五寸忒部」とある



(48)絵付下絵
図中に「荒田秋景、荒増図取いたし差上候付、此迄之所ハ御見合・・・」とある



(49) 絵付下絵(山水図)
(記録なし)



(50) 窯場における W.L. シュワルツ
1913年9月。磯窯において。後ろ姿は大館春国



(51) 川原源助・市来英吉
右の市来英吉は師匠、島津焼において



(52) 山下雪山・森山賢治(探賢)
雪山は1913年10月18日没、50歳。
探賢は苗代川居住で、雅邦の弟子



(53) 林平兵衛の茶室
磯焼の茶碗・茶色と白色の木目



(54) 龍門司 (Tatsumonji) 風景
(1913年)



(55)飾り棚の薩摩焼
 (W. L. シュワルツの所蔵品と思われる) (記録なし)



(56)飾り棚の薩摩焼
 (W. L. シュワルツの所蔵品と思われる) (記録なし)



(57)薩摩焼の茶碗・観音像
 茶碗：苗代川沈正彦蔵，おそらく朴正官によって絵付けされたもの，観音像：苗代川沈正彦蔵，黄色味がかった釉，高さ9.5インチ，1770(明和9 ※7のまちがいか)年6月の彫銘がある



(58)白薩摩花鳥文花瓶
 沈寿官作，1892年，釉下絵付



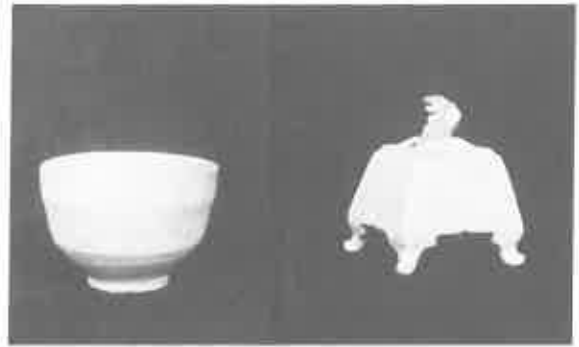
(59)白薩摩浮彫香炉と透彫蓋物
 沈寿官作，1892年



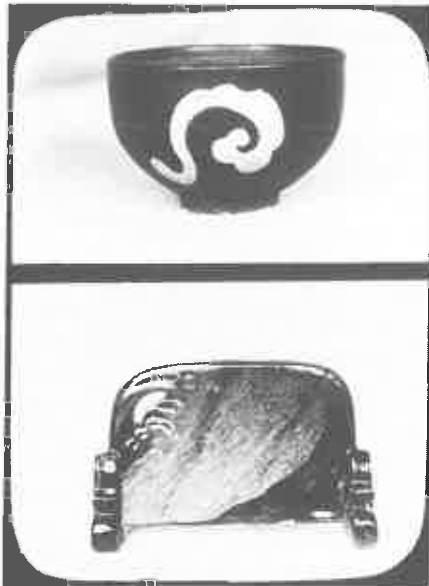
(60)白薩摩窓絵花瓶・葡萄文花瓶
 両者とも磯焼



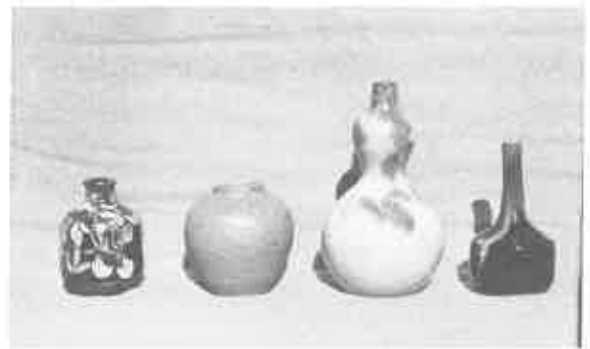
(61) 白薩摩獅子乗香炉・鼓形花瓶
香炉は熊谷正助作，花瓶は熊谷正助・内山芳園作



(62) 白薩摩茶碗・獅子乗香炉
両者とも苗代川，沈正彦蔵



(63) 薩摩焼雲文茶碗・硯屏
茶碗：帖佐 蓑毛三造蔵，内側に水文，側面は薄く真っ黒で，金色の荒い斑点があり，雲の文様がある，硯屏：加治木曾木貞二蔵，川原十左衛門作 1783 年 11 月，褐色と淡青色の釉，白色粘土
【現在 上は始良町歴史民俗資料館蔵，下は個人蔵(黎明館保管)】



(64) 龍門司焼 4 点
(記録なし)



(65) べっ甲釉香炉
平佐べっ甲手



(66) ネガ 白薩摩飛鶴文花瓶
黒松清兵衛蔵，肥後如雪絵付，1890 年頃



(67)ネガ 白薩摩仙人図花瓶・白薩摩花卉図花瓶
船崎吉次郎作，本田松雪絵付



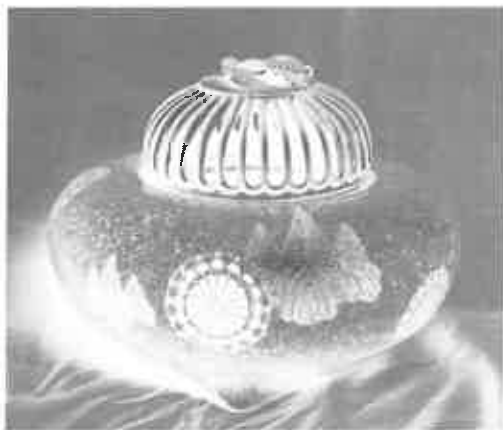
(68)ネガ 白薩摩茶壺形飾茶壺
本人蔵であつたが地震で破損。平岡製，1913年の品評会で4等賞



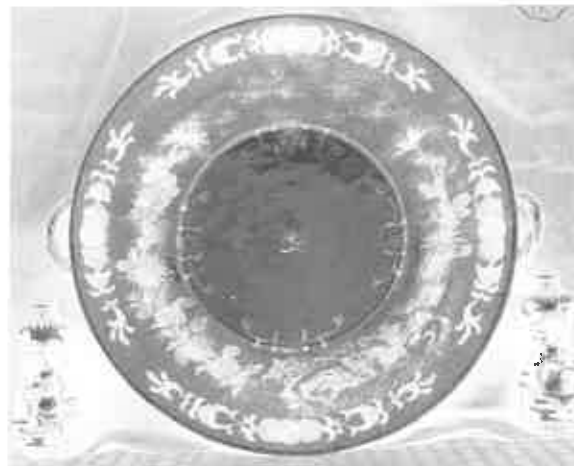
(69)ネガ 白薩摩浮彫香炉・花瓶
花瓶：上原熊二作，香炉：森田七之助作



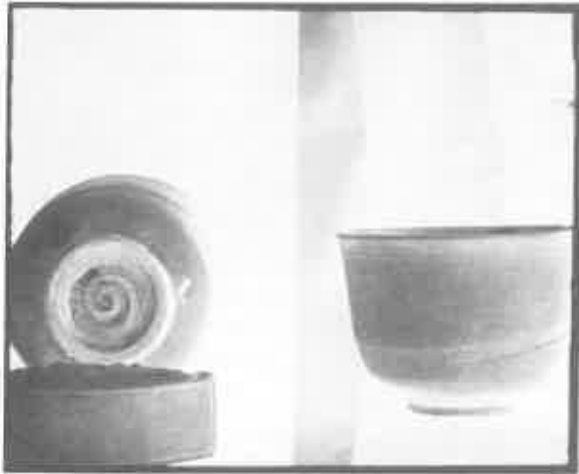
(70)ネガ 白薩摩透彫宝袋形香炉・白薩摩浮彫香炉
隈元金六作



(71)ネガ 白薩摩菊桐文香炉
1890年頃



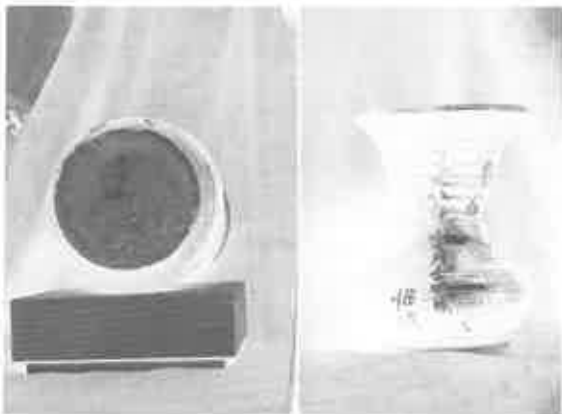
(72)ネガ 白薩摩菊唐草文把手付皿・白薩摩菊散し瓢形花瓶
黒松清兵衛蔵，1873年頃の皿，磁器の壺 1840年（苗の印）



(73)ネガ 白薩摩茶碗 (全体と高台)
左近充博士蔵。星山印



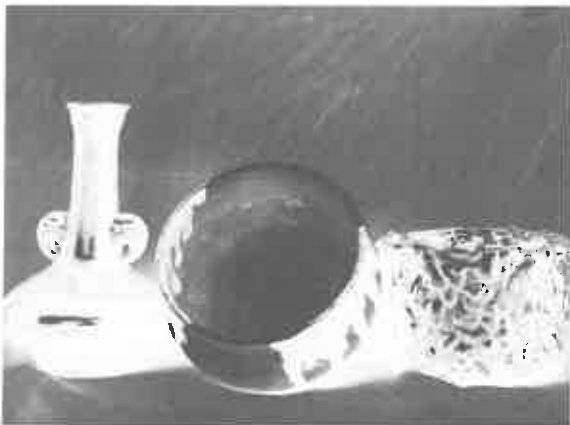
(74)ネガ 白薩摩雲珊瑚文茶碗
山野田一清蔵，およそ 100 年前のもの



(75)ネガ 寛文三年銘飴釉仏花器
(記録なし)



(76)ネガ 薩摩焼花瓶・茶碗等
興業館蔵



(77)ネガ 薩摩焼花瓶・茶碗
森山助次郎蔵。磯焼，1890 年頃。茶碗は 1913 年に購入



(78)ネガ 白薩摩大黒像他
沈寿官製



(79)ネガ 白薩摩七福神像
苗代川 東郷寿勝製，1899年



(80)ネガ 硯屏下絵
藩主斉彬のデザイン写，図中に「若殿様御自筆図写，弘化三年十月廿三日，磯御茶屋二而被仰付」とある



(81)ネガ 市来英吉
市来英吉は師匠，島津焼において

4 W.L.シュワルツの薩摩焼に関する論文

W.L.シュワルツは、30歳の年1919年に日本を去るが、日本を離れる前に薩摩焼と陶工に関するガラススライドと論文を準備しており、それを1921年10月9日にロンドンの日本協会で発表している。また、写真入りの論文は『薩摩の陶工と陶器』のテーマでロンドンの日本協会の紀要に掲載された。("The Potters and Pottery of Satsuma", Vol. 19, Transactions of the Japan Society of London, 1921)

次にこの論文を翻訳して紹介するが、論文中の写真解説の後に付けた (GS No.) は、前述のガラススライドに付した番号である。

なお、論文中にはこれらのガラススライド以外の写真も掲載されているが、これらは割愛した。

薩摩の陶工と陶器

ウィルリアム・レオナード・シュワルツ

日本の最南端、薩摩の地において、有名な陶器が生産されている。それらは、鑑定家によって薩摩焼と名付けられている。薩摩焼のうち白い焼物は、化粧質の釉薬に蜘蛛の巣状の美しい貫入が特徴の焼物であるが、その象牙のような輝きの美しさも、いろいろな色や金で模様を付けるための素地としても、不透明な焼物の中では世界でも最上級のものとして位置づけられている。白い焼物ほどには知られていないが、もう一方の焼物（黒薩摩）を見ても土を処理する技術が熟練していたことがわかる。真の陶工のその技術は、模型製作者や磁器の絵付け師のそれとは明らかに異なっている。

この熟練した技術は、16世紀の動乱期、太閤秀吉時代の日本では全く見受けられなかったが、朝鮮では確かに存在していた。薩摩の領主、島津義弘は330年前の秀吉の朝鮮出兵に参加していた。その日本の軍隊によって連れてこられた捕虜の中には、17の陶工の家族男女44人がいた。この人たちが薩摩に到着したのは1600年か、1596年である。彼らは、薩摩西方にある串木野と現在の鹿児島市に上陸した。

【(写真1) 観音像, 1776年6月の日付, クリーム色の釉, 苗代川焼, 高さ $9\frac{1}{4}$ インチ】 (GS57)

【(写真2)・芳仲作の黒色茶碗 (薄茶茶碗), 交河土の印がある。火計り, 古帖佐焼, 高さ $2\frac{3}{4}$ インチ
・白色蛇蝎茶碗 (濃茶茶碗), 高さ $3\frac{15}{16}$ インチ】 (GS9) (GS23)

この鹿児島の地域は、彼らの滞在にちなんで高麗町“高麗通り”と名付けられている。串木野は海に面しているので、この地に上陸した朝鮮人達は、望郷の念に駆られて嘆き悲しんだために、1604年の冬、通称壺屋 (壺町) と呼ばれる苗代川に移された。ここは、現在川内線で鹿児島から車で1時間15分のところにある東市来駅から歩いて15分のところにある。鹿児島市に上陸し、そこに居住していた朝鮮人達は、1670年苗代川に移され、この時の村の人口は100家族にも増加した。

薩摩の領主は、当時鹿児島市には住んでいなかった。というのは、朝鮮出兵後の1600年に関ヶ原の戦いで徳川家康と敵対したが、この戦いで家康が日本の覇権を握ったために薩摩の一族は、防御を固めるために首都を栗野に置かなければならなかったためである。現在、ここは鹿児島線沿いの小さな山村に過ぎないが、戦略上の重要な地点であった。朝鮮人捕虜の何人かは、領主の心を紛らわすために、ここに連れられて来たらしい。金海という朝鮮人が、ここで最初に領主のために陶器を作ったということは島津家のどの記録にもある。金海に対する褒美は、一對の刀と星山仲次という名前であり、この名前は、彼の長男によって代々受け継がれた。言いかえると、金海は日本人の侍として帰化したことになる。当時彼は、26歳であった。その年の冬、一族の首都は帖佐に移り、そしてそこは最初の重要な焼物の仕事場になり、窯が建設された。

帖佐は、重富と加治木駅の間にある普通の村で、鹿児島市から国道に沿って約15マイル離れているが、ここで陶器が生産されたのは、1600年から1608年にかけての数年間だけである。しかし、「帖佐焼」という名は、現在仲買人達が勝手に使っており、特に古いタイプのを帖佐焼と呼んでいる。栗野と帖佐は、火計り焼と呼ばれるものが作られた場所である。これらの製品には、黄色い河、黄河と呼ばれるある場所（中国？）から運ばれて来た「交河の土」として知られる粘土が使われており、火だけが日本のものである。それ故、「火ばかり」（注3）という名前は、「ただ火だけ」を意味する。ここでは、茶碗のほかに、水差し、茶入れやそのほか茶道に使う道具が作られ、そして徳川家康によって謹慎させられ、引退していた義弘公が使っていた。

義弘は、金海改め星山仲次に1年当たり45俵の米を与えた。陶工達の大きな喜びは、領主がしばしば工房を訪れることであり、そして良いできの物には焼成前に印を押し、悪い作品は命令によって割られた。義弘は、大変金海をかわいがり、後には名古屋近くの陶磁器の中心地である瀬戸に、高木元六左衛門（？）を付けて修業に出している。ここで、彼は5年間勉強をし、帰国後は新しい釉を使って茶入、水差しを作り、銀を若干拝領している。この銀で、金海は田圃を買い、裕福になったので、領主からの支給米の内15俵を辞退すること、そして残りの30俵を陶工達のために使うことを許可された。帖佐における生産は、義弘が加治木に移った1608年に終わり、生産が再開されることはなかった。

星山仲次に関して言われる、あることがある。日本人は、陶器の収集についてはいつの時代のものにも魅せられており、ある古書には、彼の死後ちょうど40年経た時点でさえ、彼の作品録に記されているものは、30から50両の価格であったと記録されている。数点しか存在しない火ばかり手は別にしても、これらのことは一種の伝説であると思う。彼の最も優れた製品には、金の押印がしてあるのがその特徴であるが、その形はむしろ平凡なデザインのものである。その当時から偽物が作られた記録があり、厚さが本物より少し厚いと言われる。

前述した加治木は、鹿児島から鉄道線で13マイルのところにある。星山が築いた窯の場所は、現在では確認できず、そこで結構多くの陶器が今まで生産されて来たと言うことぐらいしかわかっていない。おそらく、それは竜門の滝の近くにある龍門司（たつもんじ、または、りゅうもんじと呼ばれるが）の辺りであり、そこでは今日まで陶業が続いている。この陶工達は、芳仲という朝鮮人が自分達の祖先であると

考えており、川原とか山元という名前を持っている。金海の子孫星山金和は、家久公が鹿児島を首都にした時、加治木から呼び寄せられた。

【(写真3)・ひきがえる肌(どんこ肌)の花瓶, 灰白色の斑点のある黒褐色, 内側は灰色の陶器, 観音焼(小野の発明), 高さ11インチ】

【(写真4)・黒色梨子肌茶碗, 二つの伝統的な雲文がある。二重のヒビ(二重貫入), 高さ $3\frac{1}{16}$ インチ
・蛇肌(蛇蝟)茶碗(抹茶碗), 赤色粘土の素地に暗緑褐色, 高さ $3\frac{1}{4}$ インチ
・茶碗(薄茶茶碗), 小野の発明したもの, 暗緑褐色の蜘蛛の巣状で緑灰色のもの, 高さ $2\frac{5}{8}$ インチ】(GS63) (GS24)

【(写真5)・薩摩焼 右側の二つの茶碗は, 1871年鹿児島を訪問した明治天皇のために作られたもの, 他のもものは1896年御庭窯で作られた
・薩摩焼 筆者が, 1913年川原源助から与えられたもの】(GS76)
(GS30)

【(写真6)・小野元立院によって作られた黄色の花瓶 寛文8(1668, 原文には1673とある)年11月(原文は10月)の年紀とサインがある。作者によって井手之口権現に奉納されたもの(筆者の収集品)
・川原十左衛門(芳工)によって作られた卓上衝立(硯屏) 白色の素地に褐色と淡青色, 高さ $6\frac{1}{4}$ インチ
・古龍門司焼, 天明3(1783)年11月の年紀がある】(GS28) (GS63)

龍門司で生産される焼物は、通常赤い粘土で作られ、多種類の釉で装飾された。時には、白色の粘土が使われることもあり、稀に釉下に色づけされたものもあると言われている。これらの焼物すべては、表面が粗く、厚いので日常の使用には適さない。そのために、肥前の有田から常に磁器が、薩摩に輸入されていた。1660年、薩摩に小野元立院と言われる僧がおり、彼は古いものや陶器が好きであったという記録がある。彼は、この龍門司地域に住んでいた。彼の友人の一人で、磁器の輸入がうまくいかず、薩摩焼の生産品だけで経営を成り立たせたいと思っていた野田吉衛門は、小野に磁器の生産を試みるようにしきりに勧めていた。共同出資し、職人を確保して、彼らは黄色い瀬戸釉並の磁器を生産することに成功した。領主は、彼らに金3枚と銀16ポンドを与えたが、しかし、2年後、彼らは在庫を抱えてしまい、全然儲からなかった。こうして、小野元立院は資金を引き上げられ、仲間を失った。しかし、小野の努力は報われ、1681年に大きな特典を与えられた。それは、領主の費用で、鹿児島町の彼の製品を売る販売店が作られたことである。毎年の年末年始に、あるいは江戸からの到着や江戸への出発の際に、小野窯の製品である皿や碗を1ダース領主に贈呈することが慣習となった。

加治木の町では、小野元立院はチョコレート色の粒状の釉で覆われる陶器の発明者であると言われている。しかし、現在までこれを作り続けているのは、川原家のみである。川原家の最後の4代は名人といわれ、ふしぎなことだが領主の管理から全く独立しており、自分達の作品にサインし、印を押すことができ

た。川原十左衛門は 1746 年に生まれ、才能があり 23 歳で鹿児島豎野にある藩主の窯に召し出された。彼は、そこで 20 年間働き、有名な河野仙右衛門の弟子になった。彼のサインは「芳工」で、“香り立つ仕事”という意味の名は、藩主から贈られたものである。1780 年、藩主久義（重豪のことか？）は彼に肥前で磁器製作の技術を学ぶ許可を与え、その資金を与えた。そして彼は、その年の 6 月 29 日に加治木に帰ってきた。彼は、それから龍門司で多くの釉薬を使った作品を作った。その中でも、鮫焼（エイ肌の陶器）は芳工の発明であると、彼の子孫達は言っている。

川原十左衛門は、さらにもう一度、技術の研修に派遣された。それは、1794 年のことで、この時彼は、鹿児島の陶工で、朝鮮陶工の子孫でもある星山忠兵衛を伴って、伊勢、瀬戸まで行くよう命ぜられた。彼らは、旅の費用として 1 日に金 6 文を与えられた。博多で、十左衛門は、高取陶器の極意を学んだ。そして、鹿児島で、彼は首尾良くその生産に成功した。彼の曾孫は私に、十左衛門がこの陶器の極意を得ることを拒否されたとき、毎日風呂で彼の背中を流していた女中が、よそ者の彼を気の毒に思い、その極意を教えてくれたのだと語った。10 月彼は京都を経由して、錦光山窯の監督を務める青木宗兵衛を訪ね、瀬戸に行き御深井焼を学び、それから再び京都を訪ね、1795 年 1 月薩摩に帰ってきた。彼は、白素地の上に金で装飾を施した焼物を作ったと言われており、これが通称“薩摩”と呼ばれているものである。十左衛門の息子十徳は作品に芳平と印を押した。十徳の息子は芳寿とサインし、多くの優品を作った。1913 年私は、川原源助を訪ねた。その時彼は 78 歳であったが、芳光あるいは「ヨシミツ」の名前を使っており、その老人の写真を撮ると、彼は幾分満足そうであった。

話はこの地方での陶器製造の始まりに戻るが、これらの陶工達のうち偉大な発明者は、朝鮮人の朴平意という、金海と同時代の人であった。朴は、中国の粘土を使って栗野で成功した陶工の一人で、1610 年、沈當吉という男を伴って、苗代川にある大きな朝鮮人の村を離れ、白い焼物を作れる土を探しに出発した。この仕事で、朴と彼の案内人は成功をおさめ、彼が作った作品は、韓国の焼物“熊川”に匹敵するとして義弘から賞賛され、義弘と彼の息子家久は、苗代川の陶器製造所を訪ね、捕虜陶工を勇気づけ、報奨を与えた。

【(写真 7)・薩摩焼個人窯の大家, 1913 (大正 2) 年 ・工作中的川原源助 (芳光), 1913 (大正 2) 年】
(GS51)

【(写真 8)・2 個の白茶碗 細かな貫入の釉, おそらく苗代川の製品, 高さ (上部) $4\frac{1}{2}$ インチ, (下部) 3 インチ】(GS14)

白い焼物を作るための土は、火山性の温泉地の付近にある。霧島山の白い粘土、指宿の 2 種類の土、加世田の砂（どちらも開聞岳の近く）で素焼を作り、長石と木灰を釉薬に混ぜる。上等の土が底をついてしまい、このことが先祖の作っていた細かくひびの入った焼物を生産することができなくなった理由であると、今日の陶工たちは思い込んでいる。しかし、粘土を精錬する際により配慮を加えれば、より良い結果

が出ることも、また確かなことである。不思議なことに、島津藩主のお庭窯の製品の中には、粘土の精練に優れた技術を持っている他の営利会社の焼物より劣っているものもある。

粘土の処理の最初の段階は、熟成である。そして、すべての湿気が消失するまで乾燥させておく。次に、粘土は重い乳棒を使って乳鉢の中ですりつぶされ、その後適当な割合に混ぜ合わされる。さらに、粘土は水の入った樽の中に入れられ、掻き混ぜられる。乾燥と粉碎のこの工程を4、5回繰り返した後、不純物は取り除かれ、そして乾燥した土が糞状のものに粘着するようになると、製作に使うことができるものとなる。茶碗や花瓶などすべての円筒状のものは、ロクロに据え付けられる。ロクロは、右足で蹴られ、左に回転する。薩摩の陶工達は、型の使用や曲線的な形を作ることが非常に上手である。手やロクロによる成形の後、すべてのものが乾燥するよう離して置かれ、固まった後に鉄の道具で仕上げられる。竹や糸が、直径を測る定規としてずっと使われてきた。

薩摩で使われる典型的な窯あるいは炉は朝鮮式のもので、傾斜面に作られた数房の焼成室からなっており、雨で崩壊しないように屋根がかけられている。松の木は、熱が高くなりすぎないので、焼成にはこの木が焚かれる。窯のそれぞれの焼成室は別々に焚かれ、2時間の間隔で点火される。しかし、焼成室はすべて一晩たった後に、同時に空にされる。私は、まったく窯の温度を確認することはできなかったが、比較的低いようである。しかしながら、最も良い作品は、匣きびに入れる必要がある。側面の色見穴からは、常に内部の様子を見ることができるようになっており、温度調整のために薪の破片が次々と投げ入れられる。これは、朝鮮において300年以上の間行われてきたやり方である。今日、窯の火入れは、神官の御祓いの後に行われ、これを口実に一晩中酒宴が続くことになる。

これは素焼きで、その後これに泥状の釉が掛けられる。釉に浸された後乾燥され、一晩焼かれる。もし、この釉に鉄を加えたら黄色味を帯びる。薩摩焼独特のヒビ模様は、焼成中素地よりも釉が膨張し、そのため冷却中に網状のヒビが入ることによってできる。貫入が細かければ細かいほど、また亀裂口が小さければ小さいほど、素晴らしい製品といわれる。特に現代の陶器の多くは、釉の二重掛けと2回の焼成がなされており、貫入の数は2倍にもなっている。これは、1896年領主忠義の別荘の場所（庭）で初めて生産されたので、お庭焼と呼ばれている。現代の装飾の技法は、過去の標準的なものに比べると著しく劣っているというしかない。絵付け師の中には、製品の表面全部に絵を描こうとする者もいる。しかし、本来、装飾は、釉の掛かった素地の輝きを引き立てるものであるはずである。今日、使用されているすべての顔料は、ヨーロッパ産のものである。本来、薩摩焼のすばらしさは、純粋な金属質の顔料で装飾されていることである。

私は、1835年の苗代川における生活の様子を2場面紹介することができる。それは、当時編集された薩摩地方の公式案内書の『三国名勝図会』からである。封建時代が終わると、血族結婚を強いられ、朝鮮の言語、装束と習慣を守っていた苗代川の住人達のすべては、日本人の間で軽蔑されるようになった。かれらは、壺（壺人）と渾名され、そのため彼らの子孫は、しばしば名前や仕事を変えた。私の経験から、朴ぼくは山野田と新しく名乗り、県庁の役人になり、卞べんは神官となって、染浦泰京と名乗ったことが確認されている。130年前、橘南溪という一人の旅人が、苗代川に関し次のような記事を残している。「私は、朝鮮の

焼物が作られている工房と窯を訪ねた。そこで、彼らは朝鮮から伝えられ、子孫に受け継がれた技法を使っており、白い焼物は中国から輸入されたもののように非常に美しかった。日本で焼かれたもののように見えない。ということは、この美しいものは、領主の楽しみのためだけに隠しておかれ、売買は絶対に禁止されているので、通常人々はこの陶器を所持することはできず、他の地域では見ることもない。私は、白いものを手に入れたいと案内人に頼んだが、それは不可能であった。ただ、私が遠くから来たものであることから、内密に美しい黒色の小さな杯を一個手に入れるのがやっとだった」。

【(写真 9) 1835 (天保 6) 年の苗代川窯，生産の諸過程を示す (三国名勝図会から)】 (GS36) (GS37)

【(写真 10)・茶碗 青色の伝統的な雲と絵具によるサンゴ枝の絵付け，高さ 2 インチ (注-次の作品では，貫入は次第にヒビの表面を覆う顔料に侵入している) ・朴正官 (?) の茶碗 1850 年頃の苗代川製，錦手の湯呑み，高さ $3\frac{1}{8}$ インチ】 (GS7) (GS57)

白い焼物は別として、およそ 1840 年頃までに苗代川で作られた陶器は、古風な装飾のある三島手の灰色の焼物、黒い焼物、赤い焼物、そして日用品の壺や水差しだけであった。この頃、正官は、これは別系統の朴であるが、鹿児島で行われている白い焼物に金と絵具で装飾する方法を苗代川に紹介して欲しいと頼んだ。彼の要請に対して、藩庁は樋渡伝兵衛、内田源助を指導者として苗代川村に送り込んだ。朴は非常に勤勉な弟子で、その技術をすぐに修得したので、指導者達は 1844 年に引き上げていった。従って、無彩色の焼物は、これ以前の苗代川窯のものといえることができる。

1870 年、日本の政治体制の変革に伴い、苗代川の領主用の陶器は廃止され、鹿児島陶器会社に続いて玉山会社が設立された。1872 年、日本政府は、ウィーン万国博覧会に展示品を出品するために、かつて廃止された領主の窯の責任者であった若い沈寿官に注文をした。沈寿官自身が、生涯の記録の中で述べているように、彼らはこの注文のために長い間、昼夜を分かたず働いた。6 フィート以上ある花瓶を作り、金や銀、そして日本の虹の色である 5 色で装飾した。このことによって、輸出用の受注に道が開けた。前述した二つの会社が破産した時、沈寿官はその職人達を雇った。彼自身も、若い頃は陶工であったが、後年には約 60 人の職人の管理に専念した。絵付師の何人かは、東京に派遣され、橋本雅邦のような人の元で修業した。沈寿官の名前は外国でよく知られているが、1888 年に透彫り装飾を導入したことで、彼の名前は長く記憶されるようになった。彼は、鹿児島県知事の加納子爵から借りた古い中国の青銅器に関する本から、このヒントを得たという。

しかし、外国人からの薩摩焼に対する需要は大きく、1900 年までは全部の注文に応じきれなかった。こうして、沈寿官は繁栄の渦中を生きていた。彼の息子がこの仕事を続けているが、今では、苗代川は数人の絵付師がいるのみという不況下にあり、生産の中心は、鹿児島市であると言ってもよい。

だいぶ古い時代、日本で生まれた金海の息子星山金和の時代まで戻るが、優れた作品の多くは、まちがいなく薩摩の鹿児島城にいた領主の近くで作られている。金和は、日本名を星山弥右衛門といい、磁器の

修業のために肥前へ派遣された最初の人である。弥右衛門は、佐賀公の陶工の責任者である副田吉左衛門と親しくなり、彼の知識を教えてほしいと頼むと、副田は、大川内の村ではそのことは禁じられていると話した。彼は、弥右衛門に薩摩に一旦帰り、そして正式に何人かが教えを受けられるような訪問の機会を再度つくれば、教える許可が出るかも知れないと忠告した。弥右衛門は、この提案に従い、藩庁に報告したので、責任者は佐賀藩に対して書簡を書いた。弥右衛門金和、弟の休右衛門金加、そして役人川北孫左衛門は、佐賀の秘密を教えてもらうように涙ながらに頼んだが、それはむろん演技であったにちがいない。しかし、計画は成功し、彼らは南京磁器、青磁、瑠璃色の焼物、金で装飾した焼物など、彼らが生産するためのすべての技法を学ぶことができた。彼らの作った試作品は、領主のもとに持ち帰られ、領主は彼らの作品に対し銀を与え、彼らを鹿児島島の陶器の責任者とした。弥右衛門金和は82歳で没した。それは、一門の工房と窯が、豎野に開かれた次の年のことである。

1681年、鹿児島市にある城山の後方を走る谷間に位置する豎野に、一門の工房が設立され、そこで薩摩焼の最高品が生産された。今日、人口の増加による開発で、この場所は埋め尽くされ、窯の跡は残っていない。しかし、窯が最初に建てられた時豎野は郊外にあり、火事の危険があったので隔離されていた。豎野の監督は、金海の孫星山金貞嘉入であった。彼は、1649年から1722年まで73歳の生涯を生きた。この時代、金色のように装飾された焼物（金襴手の焼物）、日本語で錦手と言われる製品は、天皇、将軍、薩摩の領主3家のためにのみ作られた。このことは、島津家の公式記録に記されている。名工として知られる河野仙右衛門、川原十左衛門芳工、狩野派の絵師探元などが、豎野焼の品質向上に貢献している。狩野探元は鹿児島の人で、江戸で修業した後鹿児島に呼び戻された。

【(写真 11)・三島手の丁字わかし(丁字風炉) ・豎野で作られた茶碗 星山の銘】(GS25) (GS6)

【(写真 12) 薩摩焼の絵付けのデザイン(上の香炉には、篤姫の注文と記述されている)】(GS35) (GS46)

【(写真 13)・鶴の絵のあるカップのデザイン 豎野製で1845(弘化2)年12月28日の日付 ・卓上衝立のデザイン 若き藩主島津斉彬のデザインによって、1846(弘化3)年12月17日磯別邸で描かれた】(GS34)

【(写真 14) 狩野探元及び元春によってデザインされた卓上衝立(硯屏)、白色の細片で装飾、灰黄色のもの】(GS21)

幸いなことに、ここに探元のデザインにより豎野で作られた製品の絵がある。この背面の絵は、彼の弟子元春のものである(図参照)。この時期に装飾された白い焼物の製品を、公共の博物館以外で見ることができたのはたった一つだけであり、これは極めて珍しく、希少価値がある。しかし、私は、1840年から1857

年の間に豎野でどんな仕事が行われていたかを図示することができる。それは、残念ながらその人の名前は残っていないが、ある芸術家が優れたものを厳選し、色付けされたデザインの作品に製作日付けを付けて作った作品集が発見されたからである。

その後、王政復古の最も重要な推進者の一人であり、偉大な勤王の藩主島津斉彬が、陶器の製作に大変熱心であった時期が1年あり、私は彼自身がデザインし、絵付けをした作品を、いくつか見たことがある。その時期には、二つの窯が必要とされ、一つはお城の中に設置されていた。彼の後継者、29代忠義は封建時代の最後の人であるが、1895年海岸沿いの島津の別荘のある磯に窯と工房を築いた。ここでは、多くの興味ある実験がなされ、古い焼物が上手に複製されていた。これらの製品は、「磯庭」と記され、小さな桜の花の印が押されている。忠義は、1897年逝去し、陶器製作は1899年に終わった。現在の忠重は、成人後、幸いにもこの窯を1907年に再開した。私は、これらのことについて、所長の蒲生清隆氏や職人の監督職長大館晴国氏から教わった。新しい窯の作品には、大きな桜の花の印、または「磯焼」という文字が記されている。もちろん、これらの焼物は販売用ではなかった。

鹿児島で教えている間、私は1913年の夏の終わりにこの窯を毎日訪れ、そこで3週間働いたが、陶工のロクロを十分に習得することはできないと悟った。そして、1914年の桜島大爆発の時までの私の興味は、価値ある写真の被写体を探すことであった。鹿児島市は、前世紀に3回全焼しており、このことがこの国で生活してきた人々が保存していた古い物の多くを、私が発見できた理由である。1911年、県当局は薩摩出身の和田画伯（注4）に工芸の現状とその将来について報告するように依頼した。この調査の結果、すばらしい一連の写真集が作られた。私は、これをいくつかの説明書と資料と共に和田からもらった。この写真集ができたことによって、ここに図示した作品の大多数が本物であることが、裏付けられたことになる。それらは、今や先祖伝来の家宝となり、言いかえると鹿児島県当局に対して意図したとおりの満足感を与えるものとなった。地方の知識は、この種の研究においてとても重要である。プリンクリー船長やモース博士は、鹿児島について人から伝え聞いた知識しか持たない日本人を当てにしたため、彼らの薩摩焼の研究は期待されているほどには正確でない。ここで議論するつもりはないが、地名のつけかたには問題があり、杉尾弘道のような日本人にさえ混乱させてしまう原因の一つは、豎野は鹿児島市と別な場所ではなく、壺屋は苗代川の別称であると言う事実である。川辺や平佐では（後者は川内村の近くの村であるが）、かつては典型的な薩摩焼は作られていなかったけれども、今では磁器の二つの中心地である。灰色の高田一八代焼の一種は、まだ川辺で作られており、釉を薄く塗ったものや染付の磁器は、かつて平佐で作られていたことだけは確かである。

【(写真15) 現代の薩摩焼 沈寿官によって考案された透彫りと浮彫りで装飾されている】(GS4) (GS3)

【(写真16) 輸出用の現代の薩摩焼 下段の右側の花瓶は、すでに汚れている】(GS12) (GS2)

今日の生産は、苗代川、龍門司そして鹿児島で営利事業として続けられている。私は、もし、今も装飾

が苗代川で行われているとするならば、白い素地は鹿児島、神戸、そして海外での絵付け用に売られていると疑っている。おそらく、わずか数百円の価値の品物が、毎年龍門司からやってくるが、鹿児島においてはかなりの商売が、街を訪れる観光客の土産品とされている。装飾の大部分は、ヨーロッパ流のアールヌーボーであり、それは現地の買い手を楽しませているように見え、日本で装飾した完成品の輸入はほんの少しだけである。陶工や芸術家達の大酒飲みの習慣が、焼酎と呼ばれる薩摩産の一種の米製ブランディの安さと相まって、陶工の進歩を大いに妨げていると、和田氏は語っている。職人達が彼らの製品にサインを入れることを許されないことは、大変残念なことである。よく製品に見ることができる繊細な成形や彫刻には、職人のサインは入れられないで、彼の雇い人の名前が記される。日本についてのいくつかの本の記述に、「慶田政太郎は、彼の地において最も優れた技術を持つとの評判を得ている」とあるが、この記述は事実を誤認している。慶田氏は、成功した砂糖商であり、彼が見出した最高の職人に（彼らの内の何人かは朝鮮人の家柄であるが）高額な賃金を払っているが、彼自身が偉大な陶工であると呼ばれることなど夢にも思っていない。

私は次の詩の中に、古い薩摩焼の魅力を見つけたい。七福神の一人である、福祿寿の座像に対する感激的な表現である。

滑らかな粘土を折り曲げると、それは、温和な微笑をたたえ、
結晶した釉の光沢で輝き、その輝きも身に纏う、
彼のまゆや耳、幸運を運ぶという長い耳たぶ、まるでシニムス セージのようだ、
釉の掛かったあなたのガウンの飾り模様は、
人の目を釘付けにして、いぶかしげにこう言わせる、
これが本当に、古薩摩の作品？

選ばれた土を洗う、我慢強い手から、
湿って冷たい中で、休息する熟成の歳月から、
それから6000回も叩いて良く混ぜ、良くこねることから、
成形のナイフから、釉から、火の中の再生から、
絵付師のもとにヒビ焼がやって来て、
絵師が線を描くと、巨匠の名声が入魂される、
おお、古薩摩の王子！

漢字の書物をすみずみまで読んで、
その巨匠に賞賛を与えようと探したが、
この小さな福祿寿を作ったのは誰かわからない、
封建時代の名もない陶工達、
今、彼らの極意は忘れられ、彼らの芸術は消えてしまった、

しかし、私は彼らの中に心を見つけた、

これこそ、古薩摩の心！

この論文が読まれた後で、いろいろな質問がディングウエル陸軍中佐や D. S. O. M. J. S. など多くの聴衆によってなされた。それらは時間不足のために講師が、省略した点に関するものであり、それについては前述の筆記の中に詳述されている。

R. L. ホーソン氏が、講師に対する賛辞を述べた。同氏は、大英博物館の陶磁器・民族学部門の管理者である。彼は、もし、この国にこのような論文を本当に良く理解する人がいたならば、日本の陶器は、まちがいなく公立の博物館で取り扱われていただろうと述べた。ところが、日本の陶器は大変に難しく、今までに出版された情報が少ないうえに、それらは必ずしも最高のものではなかった。しかしながら、この講師は、本当の古薩摩とは何であるかを示し、日本の陶器あるいはこれに類似するものの研究に携わっている人たちから大変感謝されたのである。最近、大英博物館の新しい部署が業務を行うのに、陶磁器コレクションの再編成が必要とされ、彼と彼の同僚は、純粹に取り引きしたり、あるいは売却したりするためだけの薩摩焼や日本の陶器を常設展示室から撤去することを決定した。彼は、この講演を聞き、まちがいなく本物であることが保証されている権威ある初期の作品を、広範囲に厳選して作られた作品集を見て、彼が今までに行ってきた選定の仕方がおおむね正しかったという確信が得られたと嬉しそうに話した。博物館に来る多くの観覧者が、一般に古薩摩と呼ばれているが、正確にはそうでないものがこんな立派なコレクションの中になぜないのか、ふしぎに思うのはこの説明がないからだ、彼は述べた。

この後、メジャー J. J. オブライエン セックストン、ホン、司書、J. S. が、心のこもった謝辞を述べ、歓呼を浴びて終わった。

【(写真 17)・古薩摩焼の現代の複製品 ・花瓶と2個の茶碗 1896 から 1900 年にお庭窯で作られた (中央の茶碗は、交河土と印がある)】(GS26) (GS77)

(以上論文の紹介)

この論文の後に、1913 年、島津家の個人窯の管理の執事であった浦生清隆によって書かれた「薩摩陶器由来」からの追補が収録されているが、内容が前述の論文とほぼ同じであるので省略する。さらに、参考にした文献類が記されるが、これも省略する。

5 まとめ

明治時代末から大正時代初めにかけて鹿児島に滞在した第七高等学校造士館の若い英語教師 W. L. シュワルツが残した当時の薩摩焼や陶工に関する記録を紹介した。

薩摩焼の研究においては、朝鮮の陶工が渡来してから江戸時代末までの歴史は、大まかにわかっており、ある程度の資料も存在するが、逆に新しい明治時代以降の資料は不思議に目にする機会が少ない。このよ

うな状況において、W.L. シュワルツの残した写真や論文は、この空隙を若干でも埋めるのではないかとの思いで紹介した。このような意味において、この小論がいささかでも薩摩焼の歴史を研究する資料になれば幸いである。

W.L. シュワルツの論文翻訳に手を入れていただいた鹿児島市在住の高橋修身氏及び資料の整理に協力いただいた当館資料調査編集員深港恭子氏に謝辞を申し上げます。

(注1)現在の鹿児島県立博物館考古資料館

(注2)この作品は、平成11年9月ミューラー夫人から黎明館に寄贈された。(詳細は『黎明館調査研究報告書』、第13号に掲載)

(注3)「火ばかり」という言葉は、主に茶道の世界で使われ、薩摩焼発祥の初期において「土」「陶土」が、朝鮮から渡って来て、「火」ばかりが薩摩のものという意味であり、紹介された作品は黎明館で保管展示している。

(注4)洋画家和田英作(1874~1959)のことと思われるが、この報告書については未見である。